

図書館
展示

Welcome to our CAMPUS

2019年4月1日(月)~5月31日(金)



新校舎のパネルのモチーフになった貴重楽譜

2011年に完成した新1号館と、今年4月にオープンしたばかりの7号館2階のカフェには、古い楽譜をモチーフにしたパネルがあります。

実は、モチーフとなっている楽譜は、図書館が所蔵する貴重楽譜です。

普段は温度や湿度が管理された保存庫に保管され、めったに閲覧することができない貴重楽譜をいくつかセレクトして展示しています。

キャンパスを歩くだけで貴重楽譜が見られる環境は音大ならではのものです。

新生はもちろん、在校生もぜひご覧ください◎

期間中、4号館図書館エントランスにて展示中！
関連図書は企画棚にあります。



新入生の皆さま、ご入学おめでとうございます！在校生の皆さまも、新しい1年の始まりですね。皆さまは大学のキャンパス内の新しい校舎に、楽譜のパネルがあるのに気が付いたでしょうか？2011年に完成した新1号館と、今年4月にオープンしたばかりの7号館2階のカフェには、古い楽譜をモチーフにしたパネルがあります。

実は、モチーフとなっている楽譜は、図書館が所蔵する貴重楽譜です。普段は温度や湿度が管理された保存庫に保管され、めったに閲覧することはできません。今回はそれらの貴重楽譜のうちいくつかをセレクトして展示しています。

新1号館にはこの他にもたくさんのパネルがあります。キャンパスを歩くだけで貴重楽譜が見られる環境は音大ならではのもの。これから4年間を過ごすこのキャンパスで、お気に入りの場所、お気に入りの楽譜パネルを見つけてみませんか？

■展示資料

ヘンデル『メサイア』

Händel, Georg Frideric, 1685-1759

Messiah an oratorio in score

請求記号：S11-327

《メサイア》のスコアは1767年に出版されたが、楽譜上の細かい直しが翌年まで4回行なわれた。その後同じプレートを用い、表紙の語句やデザイン、出版者の変更等を経て1807年までに十数回にわたって出版が続けられた。この楽譜は初版出版者による最後の版だが、正確な出版年は不明である。ヘンデルの肖像画の口絵と予約者リスト付き。この時代に大規模作品のスコアの出版は稀であったが、《メサイア》出版は出版大国であったイギリス人のヘンデルに対する敬愛の念を表している。

ブラームス『四つの歌 op. 96』

Brahms, Johannes, 1833-1897

Vier Lieder für eine Singstimme mit Begleitung des Pianoforte, op. 96

請求記号：S11-063

《死はすがすがしい夜》、《ぼくらはそぞろ歩いた》、《花は仰ぎ見る》、《船路》の4曲。ブラームスの熱烈な讃美者であり、すばらしいピアニストでもあった彫刻家マックス・クリンガーの手になる表紙である。『海』と名付けられ、色は灰色がかかった茶色、クリンガーのサイン「M. K. 86」が右下に見える。クリンガーの別の版画『風景』もくるみ表紙として使われた。世紀末的な幻想世界を顕したこの表紙について、作曲者は画家を仲介した出版者ジムロックとクリンガーに不満を表明している。

ショパン『バラード 第1番 ト短調 op. 23』

Chopin, Frédéric, 1810-1849

Ballade pour le piano

請求記号：S10-510

初版はパリとロンドン、それにライプツィヒから1836年に同時に出版された。この楽譜はライプツィヒ版初版の再版であるが、表紙のデザインが変わり、印刷方法もリトグラフになり、34小節目の右手の第4音が訂正された。“BALLADE”の周りの渦巻き模様、“Pour le Piano”た作曲者名の装飾など、新しい表紙は装飾的である。

羊皮紙に記されたネウマ譜 筆写譜 12世紀

Parchment manuscript, fragment

請求記号：S12-776

ネウマの書体や高音表示文字のある赤色譜線つき楽譜であることから、12世紀後半に北イタリア（ミラノないしはポローニャ周辺）で書かれた聖歌本の一葉と考えられる。テキストは四旬節第2週の月曜日のミサ固有文コ

ンムニオに始まり、火曜日、水曜日のミサ固有文（裏面）へと続いている。表面右側には18世紀および19世紀の筆による5種類の書き込みがある。この写本を10世紀のものとするその内容には多くの疑問が残るが、18世紀から関心をよんだ興味深い一葉である。羊皮紙の大きさは縦27センチ横19センチである。

羊皮紙に記されたネウマ譜 筆写譜 14世紀

Parchment manuscript, fragment

請求記号：S11-026

赤色4線四角形ネウマ譜によるアンティフォナ集（アンティフォナは聖歌の一種）の一葉で、テキストは復活祭用のもの。おそらく14世紀後半にパドヴァ周辺で書かれたと推定される。頭文字A（Angelus）にはキリストの復活の場面が描かれており、そこにはジョットのフレスコ画の影響が認められる。羊皮紙の大きさは縦43センチ横19センチ、頭文字Aは縦70ミリ横67ミリである。

モーツァルト全集 第一部 ピアノ編

Mozart, Wolfgang Amadeus, 1756-1791

Œuvres complètes de Wolfgang Amadeus Mozart

請求記号：S10-631

18世紀の後半は音楽史に関する書物が相次いで出版され、それに伴って作曲家の個人全集の出版が始まるが、この全集はその先鞭をつけた出版物である。モーツァルトの死後に開始された曲集は、タイトルに“Œuvres complètes”を置くが、字句どおりの全集ではなく、選集である。3部にわかれ、第1部がピアノ編でピアノ音楽、歌曲、ピアノを伴った室内楽曲の全17巻からなる。

縁飾りで飾られた緑色のカバー、当時の一流の画家による口絵、楽曲のインチピット付き内容一覧というデザインは全巻に共通している。第1巻は「モーツァルトの墓の前で悲しむ遺児を抱いたコンスタンツェ」であるが、それ以外は、ほとんどギリシャ神話にもとづくネオ・クラシックな図柄である。印刷はブライトコプフ社が発明した可動活字印刷であったが、この印刷方法は当時最も一般的に行なわれた彫版印刷に比べると経費がかかり、もはや時代遅れであった。ブライトコプフ社はこの全集の後、可動活字印刷を捨て、彫版やリトグラフによる印刷方法に転換している。

モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』ヴォーカルスコア

Don Giovanni

Mozart, Wolfgang Amadeus, 1756-1791:

München, Drei Masken, [1922]

請求記号：S10-935

様々なサイズによる25枚のリトグラフ入りの楽譜で、限定200部のうちの36番目。ピアノ編曲はベルンハルト・パウムガルトナーである。リトグラファーのヘルマン・エバース（1881-1955）は、ライプツィヒ生まれの画家で、ミュンヘン美術学校で学ぶ。トーマス・マンやリルケと親しく交際した。25の書籍にリトグラフを描いたが、その中でもメーリケの《旅の日のモーツァルト》と並んで、本書は名高い。

展示資料関連図書リストは図書館ホームページでも公開しています。

<https://www.lib.kunitachi.ac.jp/>

2019.4 国立音楽大学附属図書館

